

# オンラインヒューマンライブラリーの実践と 青陵学生司書プロジェクト

関 久美子

## Practice of Human Library Online and Seiryō Gakusei-Sishō (Student Librarian) Project

Kumiko Seki

### 1. はじめに

新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部社会連携センター（以下：青陵社会連携センター）では「ふわりとつつむ」をテーマに、多様な人々が互いを認め合い自分らしく生活していけるよう、地域の多文化共生を目的にインクルージョン講座を開講している。その講座のひとつとして2018年よりヒューマンライブラリーを開催してきた。ヒューマンライブラリーは、「障がい<sup>1</sup>をもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は1対1で、あるいは1対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』（イベント）」（横田2012, p. 155）で社会における偏見の低減と多様性への寛容な心を育むことを目的としている。青陵でも様々な障害や病気がある方やその支援者、セクシュアルマイノリティの方、そして私たちが普段直接会って話を聞くことができないような方を語り手として迎え、2018年、2019年<sup>2</sup>には従来型の対面式で、2020年、そして今回の2021年はコロナウイルス感染対策のためにオンラインでこのヒューマンライブラリー開催した。

2020年は初めてのオンラインでの試みということで試行錯誤しての開催となったが、そこで得られた知見を反映しさらなる向上を図り、2021年11月7日（日）に「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO～あなたを知ってわたしを知りたい～」と題して、第4回目となるヒューマンライブラリーをWeb会議サービスZoomを利用して開催した。本稿ではヒューマンライブラリーの運営を担う新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部学 学生司書プロジェクトの活動報告、2回目となるオンラインヒューマンライブラリーの準備から当日までの実践報告、そしてそれら一連を考察することを主たる目的とする。な

<sup>1</sup> 「障がい」「障害」の表記に関しては様々な見解によって議論がなされるが、本稿では原則その言葉を使用した者が記した表記に従い、それ以外は「障害の社会モデル」の概念をもとに「障害」の表記を使用する。

<sup>2</sup> 2019年には、「天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・いがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会<sup>2</sup> 障害者芸術・文化事業」の一企画としてヒューマンライブラリー新潟実行委員会（新潟青陵大学・短期大学部社会連携センター／新潟医療福祉大学シティズンシップ教育実践研究センター）が実施主体となり開催された。

お、これ以降、ヒューマンライブラリーでの語り手を「本」、参加者・聴き手を「読者」、スタッフを「司書」または「学生司書」とする。

## 2. 新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 学生司書プロジェクト

### 2-1. 「新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金」の獲得

ヒューマンライブラリーにおける「司書」とは、ヒューマンライブラリーの企画・準備・運営を行う主催者・スタッフをいう。青陵社会連携センターが主催するヒューマンライブラリーであるが「本」の紹介文作成と当日の運営を担うのは新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 学生司書プロジェクト（以下：青陵学生司書プロジェクト）の学生たちである。2021年度は青陵大学大学院臨床心理学研究科から1名、新潟青陵大学福祉心理学部から7名、看護学部から1名、新潟青陵大学短期大学部人間総合学科から7名（うち6名が筆者の担当するゼミ活動として）、合計16名の学生がこのプロジェクトに参加した。このうち5名は前年度から継続しての参加である。

青陵学生司書プロジェクトは2018年の開始当初より「先進的な教育方法の開発・取組」として「新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金」を継続的に獲得している。このプロジェクトは参加学生の社会の多様性に対する知識と理解を深め、多文化共生社会を牽引する人材を育成することを目的とする。多様な効果をもつヒューマンライブラリーの実践は、学生集団の自己教育力・社会人基礎力・就業力を向上させる潜在的機能をもっている（加賀美他、2012）。さらに、従来のアクティブラーニングで期待される対人コミュニケーション能力、問題解決力、論理的思考力、実行力といったスキル向上に加え「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結び付けると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」（松下、2015、p. 23）と定義されたディープ・アクティブラーニングを実践する。学生は社会の多様性に直面することで、自己の抱える偏見やステレオタイプに気づき、葛藤や戸惑いを経験し、自己内省に繋げていくことで、社会で生きていく上での力や人生の指針を得ることが期待される。

助成金としては年間10万円を限度として予算が交付される。ここで獲得した予算は、2018年、2019年の対面式のヒューマンライブラリーではその準備として後述する「本」の紹介文を作成するために、実際に「本」に会いに行く際の「学生司書」の交通費としていた。2020年以降はコロナウイルス感染対策として「本」へのインタビューもオンラインで行うために交通費は発生しないことから、その分を後述する勉強会に参加してくださる「本」への謝礼、またその際の情報保障費用として充てている。

### 2-2. 青陵学生司書プロジェクト勉強会

ヒューマンライブラリーの目的を達成するためには、まず「司書」が「本」を十分に理解し、「本への共感性をはぐくみ偏見をなくす」ことが絶対条件である（坪井、2021、p. 79）。ヒューマンライブラリーにおいて「本」との対話を通し、自己の中に無意識に存在するステレオタイプや偏見に気づき、社会の多様性に対して寛容になるという効果は「読者」にだけ見られるのではなく、同じように「司書」が準備・運営を通して多くの「本」と触れ合うことで、「司書」にとっても同じ効果が期待される。事前の「本」へのインタビューに加え、従来の対面式のヒューマンライブラリーでは、「学生司書」が積極的に「読者」として聴き手にまわることが推奨され、また準備段階での「本」との接触も含め、「学生司書」はむしろ「読者」よりも「本」とより深いコミュニケーションを持つことになり、「本」への理解も促される。しかし、オンラインでのヒューマンライブラリーでは、当日は「安全な対話の場」を確保するために「司書」は

担当する「本」に張り付くことになり、他の「本」の対話に参加することができない。担当する「本」に対する理解は深められても、それ以外の「本」の話聴く機会が持てないことになる。コロナ禍による閉塞的な状況であっても、「学生司書」が多くの「本」との対話を通して「本」を理解し、また多様な価値観に触れることによって自己を見つめなおす機会として、6月から8月にかけて「本」17名をゲストスピーカーとして招き勉強会を行った。勉強会の詳細は【表1】の通りである。

【表1】

月日	形態	テーマ	参加人数
6月9日	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> <li>通信制高校、不登校</li> <li>心の病、摂食障害、女装</li> </ul>	10人
6月16日	対面	<ul style="list-style-type: none"> <li>難病、皮膚筋炎</li> <li>腎臓移植</li> </ul>	8人
6月23日	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> <li>発達障害、パンセクシュアル</li> <li>白血病、主夫の妻、障害児の母</li> </ul>	10人
6月30日	オンライン+対面	<ul style="list-style-type: none"> <li>コロナ禍看護学生</li> <li>うつ病、適応障害</li> </ul>	7人
7月7日 <sup>3</sup>	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> <li>中途難聴</li> <li>中途聴覚障害</li> </ul>	10人
7月14日	オンライン+対面	<ul style="list-style-type: none"> <li>中途四肢麻痺</li> <li>慢性疲労症候群、獣医師</li> <li>不定性Xジェンダー</li> </ul>	7人
7月28日	オンライン+対面	<ul style="list-style-type: none"> <li>自殺未遂、アルコール依存症</li> <li>アセクシュアル</li> </ul>	7人
8月15日	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> <li>認知症（当事者）</li> <li>介護の仕事（支援者）</li> </ul>	6人

また上記の他にもゲストを交えての勉強会を開催した。9月の終わりにはNHK Eテレ番組「ねほりんぱほりん」の「“LGBT”カップルの子ども」放送回を視聴し、その後に番組担当ディレクターとオンラインでディスカッションを行った<sup>4</sup>【写真1】。また青森県でヒューマンライブラリーを開催している日本人材発掘育成協会Jinzai-Japan<sup>5</sup>からもオンライン勉強会への参加があり、10月には事務局から2名が視察のため来学され、青森での活動の様子を紹介いただくとともに、学生へのインタビューが行われた【写真2】。

このように、コロナ禍における代替手段であったオンラインという形態が予想せずこのプロジェクトの活動を学外に広げてくれている。また、青陵学生司書プロジェクトには最初から「本」をやってみたいと参加してくれる学生、あるいは「司書」を経験したのちに自分の経験も役立てたいと「本」として参加してくれる学生もいる。そして、本学の学生の「本」や「学生司書」が県外の大学や団体が主催す

<sup>3</sup> この日の「本」2名はいずれも聴覚に障害があったため、情報保障として新潟県聴覚障害者協会より要約筆記者を3名派遣していただいた。

<sup>4</sup> 「ねほりんぱほりん」はMCとゲストの語り手が人形に扮することで、普段公に話すことのできないテーマに向き合うトークショー。この勉強会の様子は新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部のHP（<http://www.n-seiryu.ac.jp/posts/news/2021100518170/>）に掲載。

<sup>5</sup> 特定非営利活動法人 日本人材発掘育成協会（<https://www.jinzai-japan.com/about.html>）

るオンラインヒューマンライブラリーに参加協力するという事例<sup>6</sup>も増えている。コロナ禍が終息すれば活動は対面に戻るであろうが、こういった他地域との繋がりや協働は学生の学びのために継続していきたいと考える。

【写真1】



【写真2】



### 2-3. 「本」の「あらすじ」作成

「あらすじ」とは「本」の紹介文である。オンラインヒューマンラインでは「読者」がこの「あらすじ」を読み、事前に希望する「本」との対話の予約を取る。「あらすじ」はタイトル、「本」の属性を表すハッシュタグ、「本」の紹介、そして担当の「学生司書」のコメントで構成されている。「学生司書」は「本」とアポイントメントを取りインタビューを通してこれらを考え、「本」に確認を取りながら「あらすじ」を完成させる。タイトルはその一文で「本」が抱える人生のテーマが分かるように、ハッシュタグは障害や病気といったものだけでなく、その「本」の趣味や従事する活動、好きなものといった人柄が分かるようなキーワードが含まれる。メインとなる紹介文は「本」が語る自身のライフストーリーを「学生司書」が自分たちの言葉で再構築する。すべてをそこで語る必要はなく、「読者」に興味を持たせ、実際の「対話」への導入的役割を果たす。コメントは「学生司書」の主観で、学生の「本」に対する素直な想い、自己の振り返りや気づきについてまとめられる。

日本で開催されているヒューマンライブラリーはこの「あらすじ」を「本」自身が書くことが多い。しかし青陵学生司書プロジェクトの「あらすじ」作成は、「本」という協力者に対し興味をもち、その心情に共感し、現状を乗り越え前に進もうとする姿勢に対し尊敬の念を抱き、自己開示をして語ってもらうことに対し感謝する気持ちを「学生司書」の中に芽生えさせる。その過程で、「学生司書」が自己の固定概念や偏見に気づき、自分に何ができるかという社会への還元について考える貴重な機会とし(関他、2019)、プロジェクト課題の根幹としている。なお2021年度作成の「本」の「あらすじ」は青陵社会連携センターのホームページ上<sup>7</sup>で閲覧できる。

<sup>6</sup> 2021年11月13日明治大学横田ゼミナール主催のヒューマンライブラリーに「本」として1名、2022年2月12日ながさき・愛の映画祭ヒューマンライブラリーに「本」として1名「司書」として1名、2022年2月26日関西学院大学日本語教育センターヒューマンライブラリーに「本」として1名「司書」として3名参加。またこれ以外に「学生司書」たちは有志で他団体が開催するオンラインヒューマンライブラリーに「読者」として参加している。

<sup>7</sup> ヒューマンライブラリー 2021 あらすじ

([http://www.n-seiryu.ac.jp/cms/wp-content/themes/seiryu/images/page/extension/ec/human\\_library/book.pdf](http://www.n-seiryu.ac.jp/cms/wp-content/themes/seiryu/images/page/extension/ec/human_library/book.pdf))



### 3. ヒューマンライブラリー 2021実践報告

#### 3-1. ヒューマンライブラリー開催

2021年11月7日（日）に「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO～あなたを知ってわたしを知りたい～」と題して、第4回目となるヒューマンライブラリーをオンラインにて開催した。今回は「本」として19名18組が参加した（内、4名が青陵学生司書プロジェクトの学生、2名が同プロジェクトのOG）。「本」のリストは【表2】の通りである。

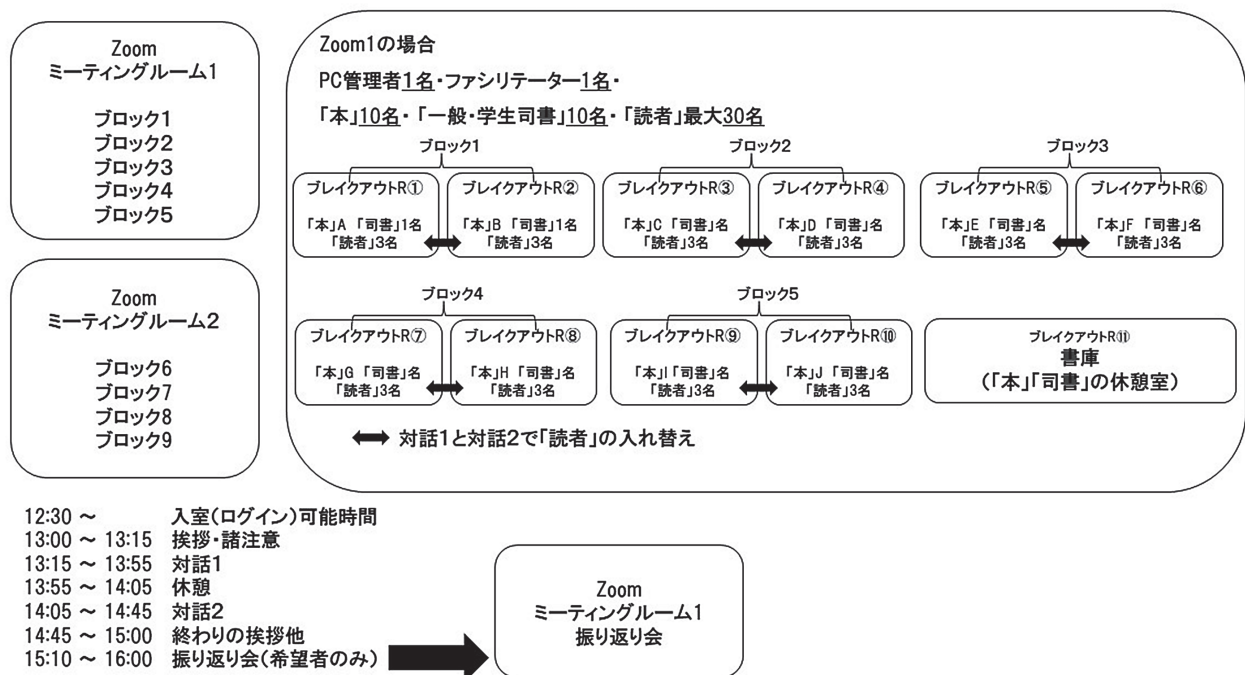
【表2】

ブロック	本	タイトル	キーワード
ブロック 1	A	夢を追いかけて ～難病とともに生きる～	#難病 #アラサー大学生
	B	経験 ～私が Kacco になるまで～	#心の病 #摂食障害 #女装家
ブロック 2	C	憧れから尊敬へ ～目指す3つの夢～	#コロナ禍看護学生 #助産学生
	D	「中途失聴・難聴」と向き合う	#中途失聴 #難聴
ブロック 3	E	人それぞれの性のかたち、恋愛のかたち	#不定性 X ジェンダー #パンセクシュアル
	F	事故が変えた今 ～障がいをもった自立とは～	#中途四肢麻痺
ブロック 4	G	マイノリティを”知る”ということ ～“知る”から“繋げる”～	#発達障害 #LGBT
	H	今日の伊藤さんが話す 87 年の人生 ～イメージとは違う介護の現場～	#認知症 #作話 #介護
ブロック 5	I	家族3人、また楽しく暮らしたい	#スーパー障害児の母 #白血 病サバイバー #専業主夫の妻
	J	“裏表”があるのが魅力 ～真面目だけど不真面目、積極的だけど消極的～	#双極性障害 #発達障害
ブロック 6	K	自由の風を吸い込もう*～難病に負けずに掴んだ 夢、幸せ～ *吉本ばなな「みずうみ」より	#慢性疲労症候群 #獣医師
	L	結婚は絶対にするもの？	#母子家庭 #引きこもり #結婚しない
ブロック 7	M	県立？私立？通信制？ ～自分にあう環境とは～	#通信高校出身 #不登校
	N	傷を癒すために傷つける	#自傷行為
ブロック 8	O	ポジティブマインド ～今の時間を大切に～	#腎臓移植
	P	自分自身を伝えるすべ	#鬱病 #適応障害
ブロック 9	Q	楽しませるために飲むお酒は楽しくない	#自殺未遂 #アルコール依存症
	I	聞こえているけれど聞き取れない	#中途難聴

前年度同様、「本」を2名ずつ組み合わせて9つのブロックに配置、「読者」は事前に「本」の「あらすじ」を読み、希望のブロックをイベント管理・チケット販売サイトPeatix（ピーティックス）を通して予約する。すなわち2人の「本」との対話を体験できる。対面式のヒューマンライブラリーでは、当日会場で多様な「本」から対話する「本」を選ぶことができるが、オンラインではあらかじめ「本」が2人セットされているため出会いの自由度が下がる。しかしその条件下でもなるべく様々な内容の話が聴けるよう、「本」はできるだけかけ離れた属性を有する者同士を組み合わせている。たとえ、一方の「本」に興味があり、他方になくとも、半ば強制的に参加させられる「興味のない本」との対話で、意図していなかった新しい世界に触れ、多様な価値観や属性への理解と感受性が高められると考えるからである。

前年は4つ立ち上げたZoomミーティングルームを今年は2つとし、ミーティングルーム1にはブロックを5つ、ミーティングルーム2にはブロックを4つ配置した。また各ミーティングルームにPC管理者（大学教職員）1名、ルームを仕切るファシリテーター（大学教員）1名、そして「本」と担当の「司書」を置いた。ミーティングルームではブレイクアウトルームに分かれて対話が行われる。対話に参加する「読者」は最大3名までとし、PC管理者によって自動的に所定のブレイクアウトルームに割り当てられる。「本」と「司書」は自由に各自のブレイクアウトルーム、「本」と「司書」の休憩場所である「書庫」、そしてメインルームを移動できる設定にした【図1】。また当日は「学生司書」以外に、一般の「司書」3名、教員の「司書」3名も参加し、10代から60代までの「読者」31名が対話に参加した。

【図1】



### 3-2. 振り返り会とUDトーク

ヒューマンライブラリー終了後、「本」「読者」「司書」の希望者約50名で振り返り会を開催した。参加者はグループに分かれて、ヒューマンライブラリーに参加した感想、今後ヒューマンライブラリーに期待することなどを自由に話し合ってもらい、最後に全員でそれらを共有した【写真3】。

また今回初めて情報保障としてUDトーク<sup>8</sup>を利用した。UDトークとはコミュニケーションの「UD=ユニバーサルデザイン」を支援するためのアプリで、音声を認識しそれを字幕に変換することができ、また多言語音声認識と翻訳機能で外国語に変換して表示することも可能である。1対1の会話から多人数の会話や会議まで、オンラインでもオフラインでも幅広いコミュニケーションに活用できるとされている。このUDトークのライセンスを持つ文織工房<sup>9</sup>（長崎県）の坂本氏に依頼し、振り返り会では聴覚に障害がある「本」とのコミュニケーションのためにZoomの画面に遠隔で字幕を表示することを試みた。

【写真1】



UDトークは話者の発した言葉を音声認識させ、直接そのまま字幕に表示するという簡易的な利用方法もあるが、今回は話者が発した言葉を文織工房スタッフ1名がリスピークし、認識、表示された字幕の修正をもう1名が行う方法をとった。従来の情報保障として利用される要約筆記は話者の話が「要約」されるため、要約筆記の主観によって細かなニュアンスが省略されることもある。しかしUDトークの場合は、話者の発した言葉がほぼすべてがリスピークされ、字幕に表示される。さらに、字幕の変換ミス修正作業のみゆえ、要約筆記よりもタイムラグが少ないことも利点としてあげられる。振り返り会ではUDトークの利用だけではなく、多様なコミュニケーションの可能性として坂本氏からUDトークについての紹介も行ってもらった。

## 4. オンラインヒューマンライブラリーにおける今後の展開

### 4-1. 前年度からの改善点

オンラインでのヒューマンライブラリーの最大のメリットは「参加のしやすさ」という点である。従来の対面式ヒューマンライブラリーのように会場まで行くという物理的な移動がなく、それに費やす時間や交通費も必要ない。コンピュータやタブレット等の機器とWi-Fi環境が整っていれば、国内外問わずどこからでも参加できる。これは、身体的、精神的事由等で移動が難しい、外には出られないといった参加者にとっても開かれた機会となる。同時にオンラインゆえのデメリットもあることは否めない。前年度、初のオンラインヒューマンライブラリー開催後、いくつかの問題点・留意点をまとめたが（関、2021）、今年度それらをもとにいくつか工夫・改善を試みた。

まずはヒューマンライブラリー自体への導入である。前年度は、「読者」はある程度ヒューマンライブラリーに関しての予備知識があると予測し、特に導入部分は用意せずに、挨拶と対話における注意点を伝え、すぐに対話をスタートさせた。しかし、実際はヒューマンライブラリー初参加者やその流れについてよくわからないといった「読者」もいたことから、今回は最初の15分を使いZoomのメインルームでヒューマンライブラリーの紹介、そして対話の流れについて丁寧に説明を行った。確かにヒューマンライブラリーの知名度は高くなりつつありリピート参加も増えているが、その背景にある取組の意義

<sup>8</sup> UDトーク (<https://udtalk.jp/>)

<sup>9</sup> 文織工房 (<https://www.bunsiyoku-kb.net/>)

や主催者側の想いを継続的に伝えていくことが対話の価値をさらに上げていくことに繋がると考える。

オンラインヒューマンライブラリーでは機器の操作に時間を要したり、電波の不調で話が途切れたりどうしても時間のロスが発生する。また聴覚に障害のある「本」との対話では、チャットやカメラを通しての筆談でコミュニケーションをとるため、他の「本」との対話よりも時間が必要になる。これらを考慮して、従来30分である対話時間を10分増やし今回は40分に設定した。

またこの延長分の10分を利用し「本」との対話への導入部分も取り入れた。最初に参加者同士が簡単な自己紹介などができるようアイスブレイキングを行った。これは単に参加者の緊張緩和のためだけではなく、「本」と「学生司書」との信頼関係構築を促すことも狙いにある。前年度からの変更点として「書庫」としてブレイクアウトルームを作りそこで「本」と「学生司書」が交流を図れるようにしたこと、また対話のブレイクアウトルームに自由に移動できるよう設定することで、両者の密なコミュニケーションが可能になった。アイスブレイキングの方法はこちらから指示はせず、担当の「学生司書」主導で「本」と相談し、それを実行することで、両者の間には「チーム感」が生まれる。「学生司書」のアンケートでも「『書庫』では『学生司書』が積極的に『本』とコミュニケーションをとっていて、去年よりもいい雰囲気だった」「打ち合わせができたので暖かい雰囲気作りができた」「『本』の方が安心して話のできる空気が作れた」といった記述が見られた。

#### 4-2. 今後に向けて（アンケート結果から）

最後に記述式のアンケート結果から特記した回答をもとに、青陵社会連携センターが主催するヒューマンライブラリーの今後の展開について考えたい。

「本」「読者」「学生司書」ともに一番多くみられた意見として、対面での開催を切望するのと同時に、オンラインでの開催も継続してほしいというハイブリッド開催に対する希望である。実際に相手を目の前にした対話から得られる臨場感、会場で感じられるイベント特有の高揚感是对面でのヒューマンライブラリーの醍醐味であることは改めて言及するまでもない。一方、オンラインのメリットは前述した通り「参加のしやすさ」が一番にあげられるが、加えて「理解してほしい」「理解したい」と想いを同じくする者同士が地域を超え繋がることのできるという喜びは「本」「読者」「司書」にとってかけがえのない体験であろう。日本中、あるいは世界中の人々と語り合える場であり、また様々な事情により物理的なバリアがある人にとっても社会と繋がり発信できる場ともなり得る。青陵社会連携センター、青陵学生司書プロジェクトでは2回の対面、2回のオンラインでのヒューマンライブラリーを経験し、十分なノウハウは獲得した。あとは実際のマンパワーの問題を解決できれば、ハイブリッド開催も可能である。コロナウイルス感染の状況を見ながら、まずは対面で再開できることを目標に、規模や開催時期の再検討することで、ハイブリッド開催の実現も視野に入れたい。

「本」のアンケートからは「『読者』がどう感じているかもっと知りたい」、そして「読者」のアンケートからは「『本』に対話の感想や自分の気持ちを伝えたい」というものが見られた。「本」の多くは、最初の10分程度を自分の話に使って、残りの時間は自由な対話の時間としている。時には立場が逆転し「読者」が「本」となって語り始めることもヒューマンライブラリーの対話では大いに歓迎される「化学反応」である。しかし日本人のコミュニケーションはどうしても「話し手」と「聴き手」といった役割を意識してしまい、対等な対話の成立が難しい。さらに30～40分という限られた時間では、「本」の語りや聞き手が主となってしまふことは否めない。「読者」の想いも共有することを目的のひとつとして始めた振り返り会だが、時間の関係上十分にそれがなされているとは言えず、オンラインでは特に対話を終えて改めて「本」が「読者」に感想を求める場、「読者」が「本」に気持ちを伝える場としての機



会はない。ヒューマンライブラリーでの対話は自由なコミュニケーションの場であるが、「本」と「読者」、そして「司書」も交えた自由でリラックスした場で、対話を終えた参加者同士がよりコミュニケーションを深められる方法を検討していきたい。

「学生司書」のアンケート結果では昨年同様「本」との信頼関係構築の重要性に関する記述が多くみられた。「学生司書」たちがこの点を最も重要だとあげてくれることは喜ばしいことである。「本」からは「学生司書」の活動や努力に対して一定の評価は得ているが、教育という面から考えた場合、いかに「学生司書」にこの「関係構築」という目標を自己が満足するレベルで達成させるかも課題のひとつである。他者との関係構築は自己の内的モチベーションが不可欠であるゆえ、まずはいかにその動機付けをするかが重要である。そして、関係構築のための物理的な機会を設けることも必要ではないか。実際、過去には「本」と「学生司書」が有志で交流を深める様子も見受けられた。コロナ禍においては「本」との接触はインタビュー時とヒューマンライブラリー当日のオンライン上でしかないが、終息後は「学生司書」と「本」のコミュニケーションの機会を意図的に増やしていくとともに、信頼関係構築のコミュニケーションについての議論を「学生司書」とともに深めていきたい。

## 5. おわりに

青陵社会連携センターでは2022年度、第5回目となるヒューマンライブラリーを開催する予定である。対面、オンライン、あるいはハイブリッドで行うかは、今後のコロナウイルス感染の状況や実際にどれだけのマンパワーを導入できるのかといった状況を見ながらの判断となるであろう。

ヒューマンライブラリーは社会における偏見の低減と多様性への寛容な心を育むことを目指しているが、それは単にマイノリティが生きやすい社会を作るといった「弱者救済」的なものではない。多様化が加速度的に進んでいく社会で生きていくためには、マジョリティ、マイノリティといったカテゴリーに関係なく、私たち一人一人が互いを知り許容できる器を個々の中に広げていくことが不可欠であり、ヒューマンライブラリーはそのレベルへ私たちを導いてくれる有用な試みである。そのためにも今後はヒューマンライブラリーを開催することだけでなく、この活動を地域に広げていくことも必須である。振り返り会では、ヒューマンライブラリーに携わる人たちのネットワーク作りの重要性や、開催のためのマニュアルの必要性といった意見も出されたことから、ヒューマンライブラリーを自分たちでも開催したいという意欲を持つ人も少なくないを考える。新潟でもヒューマンライブラリーの知名度は上がりつつあるが、今後はより多くの人々にこの取組の意義と楽しさを広めるとともに、「参加する」から「開催する」側へ意識をシフトする活動も進めていきたい。それぞれの地域で開催されるヒューマンライブラリーで、そこ住む「本」と「読者」が会うことが、その地域の多文化共生の実現の第一歩になることを期待する。

加賀美常美代、横田雅弘、坪井健、工藤和宏「多文化共生社会の偏見・差別－形成のメカニズムの低減のための教育－」明石書店、2012、150-220項。

関久美子・岩森三千代、池宮真由美、佐藤裕紀「ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果：多様性の理解を目指す試みとして」新潟青陵大学短期大学部研究報告、49、2019.3、25-41項。

関久美子「オンラインヒューマンライブラリーの実践と考察」新潟青陵大学短期大学部研究報告、50、2021.3、11-19項。

坪井健『ヒューマンライブラリーへの招待：生きた「本」が語りの心のバリアを溶かす』明石書店、2021、79項。

松下佳代「ディープ・アクティブラーニング」勁草書房、2015、23頁。

横田雅弘「ヒューマンライブラリーとは何か－その背景と開催への誘い」加賀美常美代・横田雅弘他編著『多文化社会の偏見・差別：形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店、2012、150-171頁。